2025年2月8日（土）於旧真備保健福祉会館

令和6年度歴史資料解説会「倉敷村の豪商 中島屋大橋家文書を読み解く」

# 近代大橋家の「日記帳」を読む

ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科 久野洋

## はじめに

本報告

①近代の大橋平右衛門家の概要

②明治期における大橋平右衛門の政治・経済活動

③明治末～大正期における大橋平右衛門の語り

## 1、近代の大橋家

中備第一流の門閥家

・5代：大橋平右衛門正直、文化7年（1810）生～明治20年（1887）没

山本報告、大島報告

「維新の後数年にして健康を失い、嗣子友蔵事を視る」（『倉敷市史 第五冊』）

・6代：大橋平右衛門直諒、嘉永2年（1849）生～大正11年（1922）没

「中備第壱之門閥家」「累世ノ門閥家ニシテ名誉高キ中備第壱流ノ紳士」（『両備紳門豪家名誉録』1896年）

岡本芳衛編『岡山県都窪郡案内誌』（都窪郡案内誌編纂会、1924年）

維新後の献金。災害、窮民救助、天皇巡幸、道路・警察署・病院・教育施設などのインフラ整備、軍事援護

梶谷鉄傷『倉敷興信録』（中国評論社、一九一九年）

岡山県屈指の資産家としての地位

・明治23年（1890）納税額 2063円 県下第3位

・明治37年（1904） 〃 2662円 県下第6位

・明治43年（1910） 〃 8103円 県下第3位

・大正7年（1918） 〃 7609円 県下第2位

（落合功「近代岡山における資産家・大地主」『青山経済論集』76-1、2024年）

大橋家の土地所有状況（『新修倉敷市史5 近代（上）』）

・明治27年（1894）

窪屋・都宇・児島・浅口の4郡に、田地81町9反余歩、畑地27町6反余歩、宅地3町5反余歩、合計113町1反余歩の土地を所有。倉敷町に貸家64戸、香川県直島に塩田6町歩程度を所有。有価証券を全く保有せず ⇔大原家

・大正2年（1913）

所有田地は135町7反余歩に拡大、田畑宅地を合計した土地所有は168町6反余歩。倉敷町のほか、岡山市にも貸家を拡大

岡山地域の近代化と大橋家

・岡山地域の近代化過程を考える上で大いに注目される家だが、明治期の大橋家についての学術研究は皆無に等しい

・地域の近代化に名望家や資産家が果たした役割に注目する近年の研究動向

地方政治家としての大橋平右衛門

・明治期において岡山県内の自由党—政友会の有力幹部

・ただし、政治書簡などは僅少。政治関係の史料は処分？

・明治27年8月20日大隈重信宛犬養毅書簡（「大隈重信関係文書」）

大橋家に残る近代史料は研究上の沃野

・大橋家の経営展開と岡山地域の近代化との関係は？

・明治前中期に会社発起などに積極的に関わっているのに有価証券投資をしていない？

・岡山県の自由党－政友会の領袖としてどのような政治活動を展開した？

## ２、「日記帳」にみる大橋平右衛門の政治・経済活動

「日記帳」について

・大橋家の日々の出来事を簡単に綴った日誌

・明治3、6～9、11～14、17、20、34～38、41～44年、大正2～3、5～8、10～14、15、昭和2～6年

・当主平右衛門や親族の動静、和歌、大橋家の購入品、来客人、土地・建物の売買や会社関係のメモ、書簡や書類の写し

→大橋平右衛門の政治・経済活動の具体相。本報告では政治活動を活発化させた明治中後期に注目

### （１）岡山県の政友会幹部として

明治中後期の岡山県の政治状況

・犬養毅を中心とする立憲改進党—進歩党—憲政本党—立憲国民党が勢力を拡大

⇔中央政界では与党的地位にある自由党—政友会は政治的影響力を後退させていく

・1890年代：犬養系と自由党系は勢力伯仲

1900年代：犬養系が自由党—政友会を凌駕　（久野洋『近代日本政治と犬養毅』吉川弘文館、2022年）

明治34年7月政友会岡山県支部発足

・大橋平右衛門は政友会岡山県支部の発足にあたっては奔走

明治34年7月17日松田正久宛大橋平右衛門書簡写し

県内政友会と『関西新聞』

・大橋家の資金援助のもと、自由党系の機関新聞『関西新聞』が明治32年4月に創刊

・大橋平右衛門は、関西新聞社の社長に就任

・明治33年9月の伊藤博文による政友会創立の機運に乗じて、県内政友会勢力の拡大を企図

・しかし、すぐに『関西新聞』は経営難に陥り、廃刊へ

・大橋平右衛門は明治34年5月31日に社長を辞任

・大橋平右衛門の嘆き

「関西新聞之儀昨年来三万円余の資本金ヲ投し反対新聞ヲ圧倒するの覚悟を以東奔西走、一時七千余の紙数ヲ発行スル迄ニ相運ひ候得共、又々中立派山陽新聞ノ為メニ勢力ヲ奪ハレて困難の地位ニ陥り到底小生一人の力ニ及不申、依テ毎々井手・石黒・中山氏壱時ハ相談仕候へ共、近来一般経済界不振の折柄当地方モ銀行の破綻続出し金融之逼迫之為メニ党員の多数ナルニモ不拘当紙之ヲ継続するの見込相立不申候、真ニ遺憾之至りニ御座候〔略〕廃刊スルカ又ハ他へ売却スルヨリ外ニ手段無之、依而又々井手、石黒其他の党員へも此旨通知致置候得共何ノ返事も無之、最早別ニ妙案も無之ものと思考仕候、当本県政友会ニテ機関新聞ナキトキハ恰も闇夜ニ燈火ヲ失フ如ク、折角伊藤侯の御来岡ヲ煩し党勢ヲ拡張せんとの素志も水泡ニ帰スル次第ニ候」

（明治34年9月2日改野耕三宛大橋平右衛門書簡写し）

日清戦後恐慌の影響

・明治34年6月池田章政宛大橋平右衛門「哀願書」

近来、鉄道・紡績等の事業に従事してきたが、昨年以来の経済界の影響を受けて負債が山の如し、資産が大いに減退

岡山県の政友会勢力

・日清戦後恐慌の影響をまともに受け、財政難から機関紙維持さえが困難な状況

・内訌も発生し、次第に勢力を減退させていく（明治35年3月8日山本半兵衛宛大橋平右衛門書簡写し）

政友会の幹部としての活動は継続

・政友会岡山県支部で演説会などをセッティング（明治44年8月）

ただし、党勢拡張には悲観的

・倉敷を含む第三区は犬養毅の政治的影響力が強く、厳しい（明治35年8月4日保田為一郎宛大橋平右衛門書簡写し）

・第7回（明治35年8月10日）と第8回（明治36年3月1日）の総選挙では出馬を固辞

### （2）有価証券投資から地主経営へ

日露戦争前には鉄道業・銀行業への投資を展開

・例えば、山陽鉄道株の明治34年度下半期配当金として4,136円を受領

・その他に中国鉄道、中備銀行、大阪商船などからの株式配当金

日露戦後に持ち株を徐々に整理

・大阪証券市場の情報をキャッチ、日露戦後恐慌を見据えつつ持ち株を売却

→日露戦後に大橋家経営が変化

日露戦後の大橋平右衛門の状況認識

・日露戦後は「農業を以て生計を」立てる大橋家にとって厳しい経済状況

「諸物価は非常なる高価を以て他の商工業者ニ於ては余り影響を感ぜざるも一般農民は収支之平衡ヲ失し非常の苦痛ヲ感じ居候事は動かすべからざる事実ニ御座候、以上申述候如く近来農民は非常之苦痛ヲ感じ居候折柄、諸方面ヨリ申込来るべき多数の寄付金ニ対し一々御受け致す可き事は到抵農業を以て生計を相立居候小生等ニ於ては堪得る処ニ無之候」（明治42年3月21日杉山岩三郎宛大橋平右衛門書簡写し）

小括

政治活動

・明治期を通して県内政友会の幹部として活動

・ただし日清戦後恐慌期に『関西新聞』から手を引き、日露戦後には県内政友会を側面援助

→県内政友会にとってはダメージ。その後、党勢が漸次後退

　大橋家にとっては政治・経済的ダメージを最小限に抑える判断

経済活動

・日露戦後に転換、有価証券投資を縮小

・全体として冒険的行動を控え、旧来からの地主経営を柱とする

→日清戦後恐慌での経験や家業意識をふまえた経営判断

　(その具体的経緯は今後の課題。大橋家全体の経営分析が必要)

→日清・日露戦争期に自家の政治・経済活動の停滞を見つめ、大きなリスクを冒さない方向へ

　県を代表する資産家としての地位を保持

## 3、大橋平右衛門の記憶と記録

大橋平右衛門への聞き書き

・『草秋大橋翁 話乃聴き書』(1912年6月)、『草秋大橋翁 切歯の響』(1912年10月)

・平右衛門直諒（62～63歳）が自らの足跡を振り返って語る

倉敷紡績関係者との対立

・倉敷紡績会社（明治21年設立）の創業に尽力したものの、経営の主導権争いにより、会社から排除されていく

・大原孫三郎ら倉紡関係者は犬養・進歩党系を支持

政党への関与は「他動的」

・1890年代に自由党側として衆議院総選挙の候補者になったのは、自らの意志に反する

・その後、進歩党系の「悪辣手段」「陰険手段」と対峙し続ける

→全体として自らの清廉潔白性を主張し、選挙などでは犬養系や大原系の策略に嵌まったとする

強烈なルサンチマン

担ぎ上げられ「辛抱」してきた政治家人生という語り

## おわりに

◎大橋家文書の近代史料はほぼ手つかず。研究上の沃野

①明治維新後、地域社会で幅広い公的活動を展開。岡山県屈指の資産家として成長

②明治後期に自家の政治・経済活動の停滞状況を捉え、大きなリスクを冒さない方向へ。県を代表する資産家としての地位を保持（＝この過程の分析が一つのポイント）

③大正期、ルサンチマンを抱えつつ、自らの足跡を「辛抱」の歴史と捉え返しながら、今後の大橋家の行く末を見通そうとする